

展勝地風土記

Vol.19

平成29年1月27日
展勝地開園100周年記念事業準備委員会
問い合わせ／北上市都市整備部都市計画課 ☎72-8279

展勝地開園100周年記念事業準備委員会では、100周年に向けた取り組みとして、より多くの市民に展勝地を知っていただくため、展勝地に関するさまざまな情報を紹介しています。歴史的事実、地理的事実、自然環境のこと、そして、展勝地に深く関わった人々や展勝地を題材にした美術・文芸作品などについて紹介していきます。次回は4月28日に発行します。

歴史の扉を開いた風景 陣ヶ丘

元岩手日日新聞社北上支社長 千葉 平たいら

「展勝地」と聞いて真っ先に思い浮かべる風景とは？こう尋ねられたとしたら大方の人は、桜花咲き乱れる北上川沿いの並木道と答えるだろう。だが、それも致し方ない。何しろ昨今は「みちのく三大桜名所」という名文句もすっかり浸透した。春ともなれば人々は桜を愛でるため我も我もと大河を渡る。

しかし、展勝地の中核を成すのは、桜の回廊でもなければ食堂を備えた休憩所でもない。それは陣ヶ丘と呼ばれる小高い山である。場所は県道を挟んだレストハウスの東側。近頃は足を運ぶ人の数もめっきり減ったが、あの丘こそが重要なスポットなのだ。石庭で有名な龍安寺（京都）で例えるなら白砂と石組み、そして土塀で枯山水を表現した造形

美を見るための縁側のような役割を果たす所……と私は解釈している。

その地名が表すように昔は、軍事上の要衝であった。とにかく見晴らしがいい。前九年の役では、源義家が陣を構えたとされる。それから860年。沈思の時を経て再び、この地に目を付けたのが展勝地の生みの親ともなった澤藤幸治。あの切岸から見える北上川と和賀川の流れや、広大な平野から遠く奥羽の山並みへと至る絶景を世の人々に知らしめようとした。言うなれば歴史の扉を開いた風景である。

その眺めを見ずして……

「展勝地」という呼称は、澤藤の友人であった風見章（後の司法大

臣）が考えたという話は広く知られる。ただし、最終的に決断したのは澤藤本人であったと思われる。

興味深い逸話が残っている。北上河畔に桜を植えた年のこと。彼は、仲間の1人と連れ立って陣ヶ丘に登ったという。折りしも夕日が見事な時間帯であった。その光景を眺めて彼は公園の名を決めた……と同伴者が回顧している。

かくして陣ヶ丘は、「展望の利いた景勝地」という由来を体感させる場所として、大きな役割を担う事となった。そこから分かる通り現在の桜並木は、人々を高台へと誘うための誘導路の一つに過ぎない。中国の黄山にまつわる格言風によれば「陣ヶ丘の眺めを見ずして展勝地を見たと言ふなかれ」とな



花見の時期の陣ヶ丘の賑わい



合流点と奥羽の山並みを望む



陣ヶ丘登り口付近

る。
それを裏付けるのが往時をしのぶ写真の数々だ。96年前の開園式典は無論、一年で最も賑わう花見の頃ともなれば、人々は陣ヶ丘へと足を向けた。残念な事に今はその面影も消えようとしている。
四季を楽しむ遊び心を

や待てよ。この際、清水の舞台のような思い切った仕掛けを。夢は尽きない。
北上市は今、開園100周年に向けて各種の検討作業が続けていると聞く。実に1世紀にもわたって住民と共に公園づくりを議論している自治体など他にあるだろうか。逆に言えば、そこが展勝地の奥深さでもある。歴史をたどれば官民の協働で誕生した景勝地。その原点を忘れず、もっと磨きをかけて次の世代に残す。そんな姿勢が何より大切だ。
※写真は昭和30年代に渡辺文雄氏(立花)が撮影。



陣ヶ丘から桜並木を望む

筆者プロフィール

千葉 平

元岩手日日新聞社記者。北上支社勤務時代に展勝地や北上川の舟運など、現在の展勝地一带に関する話題を数多く取材。企画連載なども手がけた。

また、「川と共に生きる全国大会 in 北上川・展勝地」(16年)、「展勝地開園90周年記念フォーラム」(24年)ではコーディネーターを務めた。

同新聞社盛岡支社長、編集局次長などを経て28年9月から岩手日日販売(株)総括。